

「ハーンとモラエス」展示会よもやまばなし四方山話

奥 正敬

今年にはラフカディオ・ハーンの没後100年とヴェンセスラウ・デ・モラエスの生誕150年という節目の年に当たります。本学図書館では、これを記念した稀観書展示会「二人の偉大な日本紹介者 ハーンとモラエス」を6月1日（火）から7日（月）にかけて開催しました。



展示会ポスターより

ハーンはギリシャでアイルランド人の父とギリシャ人の母の間に生まれ、アメリカで文筆活動をしていました。モラエスはポルトガルで生まれ海軍軍人としてマカオに滞在したのち来日し、同国初の神戸・大阪総領事を勤めた人です。いずれも明治時代の中期に来日して日本文化を書物に記し、海外で紹介しました。二人は現在の言葉で言うと「ジャパノロジスト」であり、日本研究家として高い評価を受けてきた人たちです。

本学における先達の功績

本学図書館では、図書館長を務められていた森田嘉一現本学理事長が館長時代の方針として、ハーンとモラエスの作品（初版）を網羅的に収集し、NIPPONALIA（西歐言語で書かれた日本研究書）コレクションに組み込まれていたことから、今回の展示会が実現しました。

展示会の計画段階で、私たちは展示会に付加価値を求めて、彼らの生年と没年が節目の年を迎えるという共通項の他に、この二人の人物に接点がないかを探りました。ところが、すでに

二人の日本観に共通している部分を研究された学者がありました。それも京都外国語大学に、そして、驚くことに二人もおられたのです。

ハーンからの研究

一人は、昭和47年から昭和51年まで学長を務められた梶谷泰之先生（故人）で、ハーンの研究として有名な方です。梶谷先生はハーン作品『東の国から』や『仏の島の落穂集』に書かれた畠山勇子を研究し、本学の『研究論叢』の第10号と第11号で自説を発表されています。

明治24年に訪日中のロシア皇太子に警備中の警官が切りつけた、所謂「大津事件」の発生を日本人として詫びながら京都府庁前で自決した女性、勇子。梶谷先生の論文の中で、「明治天皇は御見舞いのため、5月21日まで京都にご滞在になっていたが、5月20日の夜、若い女性が京都府庁の門前に白布を敷き、細帯で膝を縛り、露国官吏、日本政府、母親等にあてた遺書10通を置いて鋭利な剃刀をもって頸動脈を斬り、壮絶な自害を遂げていた」と記述されています。

さらに、勇子が弔われている京都下京の末慶寺を訪れ哀悼の意を表したハーンと、その後、ハーンと同じように勇子の墓に参りポルトガルの雑誌『セロンイス』や自著『日本夜話』で彼女を紹介したモラエスについて、梶谷先生は「モラエスはハーンと同じく勇子のことに心をうたれ・・・」と書かれています。私たち図書館員は、この論文に着目したことで、末慶寺の当時の住職、和田準然師を接点としたハーンとモラエスの日本観の一致を展示会で打ち出すことが出来ると判断しました。

モラエスからの研究

もう一人の研究者は、ポルトガルから来日して本学で教授をされていたジョルジェ・ディアス先生（故人）です。彼はモラエスを研究し、著書『悲しい蜃気楼であったヴェンセスラウ・デ・モラエスの東方への夢』で、「モラエスは畠山勇子なる日本の一女性に対して特別熱烈な賛辞敬意をささげている」とし、同じ考えを持つ